山形医学（ISSN 0288-030X）2023；41(2)：59-67
DOI 10.15022/0002000121

小児がんの子供と母親の復学前後の思いや言動に関する文献検討

八下田夢花*，佐藤幸子**，今田志保**

*東北大学病院
**山形大学医学部看護学科
（令和５年３月15日受理）

抄　　録

小児がんの子供（以下、患児）の復学支援にあたっては、患児とその家族が復学前後に実際どのような思いを抱いているかを理解することが重要である。本研究では、患児とその母親（以下、母親）の復学前後の思いや言動について文献検討により明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌Web版を用い、「小児がん」、「血液・腫瘍疾患」、「学校」、「復学」、「思い」をキーワードとして文献検索を行う方法により、2021年６月時点で検索された７文献を対象に、患児と母親の復学前後の思いや言動を抽出し、類似性に基づき帰納的に分析、分類した。その結果、「患児の復学前後の思いや言動」として抽出された76コードから、19サブカテゴリー、７カテゴリーが生成された。カテゴリーは【周囲の理解に関すること】【友人面】【学習面】【生活への制限や希望に関すること】【体力面】【複雑な気持ち】【感染面】に分類され、とくに治療による体力低下への継続的な支援の必要性や、病気の情報開示への支援の必要性が示唆された。同様に「母親の復学前後の思いや言動」として抽出された93コードから、27サブカテゴリー、８カテゴリーが生成された。カテゴリーは【前籍校との繋がりに関すること】【転校に関すること】【復学に関すること】【周囲の理解に関すること】【学習面】【相談相手に関すること】【患児の心理面】【感染面】に分類され、とくに前籍校と患児の繋がりを維持するための医療者と前籍校との連携や、相談体制の構築や整備など家族も含めた復学への支援の必要性が示唆された。【周囲の理解に関すること】【学習面】【感染面】の３カテゴリーは、「患児と母親に共通した復学前後の思いや言動」であり、医療者から復学先への病気や感染面での留意点に関する情報提供の支援や訪問学級、院内学級の教師による個別の学習計画の立案などに対する支援の必要性が示唆された。

キーワード：小児がん患児、母親、復学、思い、文献検討

緒　　言

小児がんは、早期発見が困難で増殖速度が速いものの、成人のがんに比べて化学療法や放射線療法が有効であるという特徴があり、数十年来の医療の進歩により長期生存が可能となってきた[1)]。国立がん研究センターの統計では、2002年から2006年の主な小児がん疾患患者（０～14歳）追跡例のサバイバー５年相対生存率は、診断時でも６割を超えることが報告されている[1),2)]。長期的な生命予後が期待される中、小児がんの子供（以下、患児）の多くが、退院後は入院前に通っていた学校あるいは新たな別の学校に通うことになり、入院中のみならず退院後においても望ましいQuality of Life（QOL）を達成することが重要となる。

学齢期の子供にとって、“学校”は家庭と同程度の日常を象徴する生活の場であり、小児のQOLには充実した学校生活が影響することも示唆されている[3)]。わが国の教育は教育基本法と学校教育法によって規定され、病弱・身体虚弱の子供に対しては特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級が教育の場として提供されている[4)]。長期入院が必要な学齢期の患児は、入院中に特別支援学校や地域の小・中学校の特別支援学級に籍を移し、治療を受けながら訪問学級や院内学級で学習を継続していくことになる[4)]。小児がんの罹患により入院生活を余儀なくされる場合、入院後も学校

生活を継続し、退院後は院内学級から地域の学校あるいは新たな学校へ円滑に通学できるよう、入院中から復学を見据えた支援が必要である。

先行研究では、患児とその母親（以下、母親）、支援を受けた教員やプライマリーナースの、復学に向けた入院期間中の様々な思いの変化を示したもの[4]、患児がスムーズに復学するための要因を検討したもの[5]、学校教諭における小児がんの認識や支援の実態を明らかにしたもの[6]などが報告されている。患児の復学支援にあたっては、患児とその家族が復学前後に実際どのような思いを抱いているのかを理解することが重要と考えられるが、その「思い」に関してまとめた文献は見当たらない。

そこで本研究では、患児の復学に関する先行研究をもとに、患児と母親の復学前後の思いや言動について文献検討により明らかにすることを目的とした。

研究方法

１．対象

医学中央雑誌Web版を用い、「小児がん」、「血液・腫瘍疾患」、「学校」、「復学」、「思い」をキーワードとして検索可能な全期間の原著論文を検索した結果、該当したのは28件であった（2021年６月18日時点）。これらのうち「文献検討」論文を除外し、患児あるいは母親の思いや言動について記載のあった７文献を分析対象とした（表１）。

２．調査期間

2021年６月から10月に調査を実施した。

３．分析方法

対象７文献を精読して、患児あるいは母親の復学前後の思いや言動を抽出し、類似性に基づく帰納的分析・分類により、その意味内容を忠実に示すコードを作成した。さらに同様の方法で、コードを分類、抽象化してサブカテゴリー化、カテゴリー化を行い、表に整理した。分析は小児看護学専門家２名と共に実施し、高い信頼性・妥当性を確保した（以下、【　】はカテゴリー、《　》はサブカテゴリー、〈　〉はコードを表す）。

結　　果

１．患児の復学前後の思いや言動（表２）

対象文献より「患児の復学前後の思いや言動」として76コードが抽出され、19サブカテゴリーから【周囲の理解に関すること】(21)、【友人面】(17)、【学習面】(12)、【生活への制限や希望に関すること】(12)、【体力面】(11)、【複雑な気持ち】(2)、【感染面】(1) の７カテゴリーが生成された（(　) 内はコード数）。

１）【周囲の理解に関すること】では、《周囲が無理解である》《身近な人の理解がある》《かつらが周りにどう思われるか気になる》《周りに病気のことをどう思われるのか不安である》《学校の先生の配慮があった》の５つのサブカテゴリーで構成された。《かつらが周りにどう思われるか気になる》では〈かつらのことをクラスに言うか迷って周りの人に相談した〉、《周りに病気のことをどう思われるのか不安である》では〈友だちに病気や治療、外見に関して何か聞かれたり言われたりするのが怖い〉などのコードが含まれた。

２）【友人面】では、《友人に病気のことを伝えたくない》《友人に病気のことを伝えるか悩む》《友人に病気のことを伝える》《友人が支えとなる》の４つの

表１　対象文献一覧

文　献
１．岸田恵美、石川眞里子：思春期にある小児がん患者の復学に関する適応に影響する要因－子どもの経験の語り－．小児がん看護　2020；15(1)：16-25
２．堀江久樹：小児がん経験者の社会復帰に向けた生活と就労．看護教育研究学会誌　2018；10(1)：51-62
３．宮城島恭子、大見サキエ、高橋由美子：小児がんをもつ子どもの学校生活の調整に関する意思決定プロセスと決定後の気持ち－活動調整と情報伝達に焦点を当てて．日本小児看護学会誌　2017；26：51-58
４．庄司靖枝：小児がんの子どもの学校の転籍に関わった母親の体験や思いの調査．小児がん看護　2014；9(1)：29-37
５．涌水理恵、平賀紀子、古谷佳由理：小児がんで長期入院を余儀なくされた児への復学支援を考える－児・保護者・スタッフの復学に向けた思いとその変化に焦点を当てて．小児保健研究　2013；72(6)：824-833
６．畑江郁子：小児がん治療を終了した青年の病気体験．小児がん看護　2013；8：27-36
７．平賀健太郎：小児がん患児の前籍校への復学に関する現状と課題　保護者への質問紙調査の結果より．小児保健研究　2007；66(3)：456-464

表２　患児の復学前後の思いや言動

カテゴリー（コード数）	サブカテゴリー	コード（数）	対象文献
周囲の理解に関すること（21）	周囲が無理解である	養護教諭が病気や後遺症に無理解だった（1）	2
		小児がんを克服したのだから闘病体験を皆の前で語るように先生に言われ無神経だと感じた（1）	2
		体力があまりなくて、他の人に何か言われることがあった（1）	3
		友だちが私のことを太ったよねって言っているのが聞こえて悔しかった（1）	6
		退院してからずっと嫌な思いをしたかな（1）	6
		自分は病気のことを何も思ってないのに、友だちには強がっていると思われている（1）	6
	身近な人の理解がある	何も言われなかったから大丈夫かなって思った（2）	1
		普通の生徒として周りと同じ扱いをしてくれた（1）	6
		復学時に学校の先生が気にかけてくれてありがたかった（1）	2
		見学しているのを見て運動できないんだって思ってくれたと思う（1）	1
	かつらが周りにどう思われるか気になる	かつらのことをクラスに言うか迷って周りの人に相談した（1）	3
		明らかにかつらかぶってますみたいな見た目に抵抗があった（1）	6
		かつらだってわかった時に誰も知らないと自分が辛くなるかな（1）	3
		あのかつらは何だろうって言われるかも（1）	3
	周りに病気のことをどう思われるのか不安である	友だちに病気や治療、外見に関して何か聞かれたり言われたりするのが怖い（1）	5
		早退することで周りにまだ病気が治ってないと思われないか心配（1）	5
		自分だけ持久走を休んでて皆からずるく見えちゃうのではないか（1）	3
	学校の先生の配慮があった	先生が病気のことをクラスに言ってくれていたからすんなり入れた（2）	1,3
		先生に頼んで仲の良かった子と一緒のクラスにしてもらった（1）	1
友人面（17）	友人に病気のことを伝えたくない	言わなかったのは友だちにどう反応されるか恐かったのかもしれない（1）	6
		クラスメイトに病名は言わないで欲しい（1）	3
	友人に病気のことを伝えるか悩む	友人へ病気のことを言った方が楽だと先生から言われたらそうだな（2）	3
		違う学校から来た人は入院のことを知らない（1）	3
	友人に病気のことを伝える	病気のことを言ってよかった（2）	3,6
		仲の良い友だちには自分の病気のことを話した（2）	3
		友だちと白血病の話題になったら自分もそうだったと軽く打ち明けられるようになった（1）	6
		病気はずっとついてくるものだから何かを説明しなきゃいけない（1）	6
		病気のことを説明するのは緊張した（1）	3
	友人が支えとなる	保健室登校の時、担任の先生が伝えてくれて友だちが会いに来てくれた（2）	1
		小児がん経験者と友人が大きな支えだった（1）	2
		人から『はげている』と言われた時に友達が『気にしなくて良い』と言ってくれた（1）	2
		たまたま隣の席が仲良かった子ですごい心強かった（1）	1
学習面（12）	勉強の遅れに不安がある	院内学級の勉強時間は学校より少ないため勉強の遅れが心配である（3）	5,6
		身体的な問題はなかったが学力に問題があった（1）	2
		勉強に遅れたくないから学校に行きたい（1）	1
		学年が上がると学校の勉強も今までより難しい（1）	5
	院内学級にメリットを感じる	病院に来ても院内学級で普通に勉強できることが嬉しかった（3）	2,5
		院内学級ではイベントや制作など特別な体験ができて嬉しい（1）	5
	前籍校の友だちと同じ内容で学びたい	院内学級で使う教材やドリルは前籍校の友だちと同じものがいい（1）	5
		地元の学校から定期試験問題を送ってもらうなど病気を理解し気遣ってもらった（1）	2
生活への制限や希望に関すること（12）	通院や生活への制限で学校生活に影響がある	見学は嫌だ、みんなと一緒のことがしたい（4）	1,3,5
		体育をする時に怪我するのは危ないから気をつけている（3）	3
		治療で食事が違ったり、早退したり、寂しいし悔しかった（1）	2
		外来はほとんど1日かかるから今日は今日で休もうと切り替えている（1）	1
	また同じ学校生活を送りたい	復学したら友だちには前と同じように接してほしい（1）	5
		またみんなと会えたらうれしい（1）	5
		帰ってまた美味しい給食を食べたい（1）	5
体力面（11）	復学後は体力が落ちている	体力が無くて学校に行くだけでもしんどい（4）	1,2,3
		筋力が落ちて皆についていけない（2）	1,5
		闘病後は体力が無くなり部活動ができなくなった（1）	2
		持久走練習を全部歩き終わってからちょっとずるいかなって（1）	3
		さぼってばかりだったけど最近は体育も頑張るようにしてる（1）	1
	退院後の体力回復のための支援がほしい	退院後に体力回復のための専門的な指導があれば良いと感じる（1）	2
		小児がん経験者向けに体力回復をするトレーニング施設や相談できる体制が必要（1）	2
複雑な気持ち（2）	特定できない不安	実際に学校に戻ってみないとわからない（1）	5
	退院に対する複雑な気持ち	退院は嬉しい気持ちもある反面、嫌な気持ちや前向きになれない気持ちもある（1）	5
感染面（1）	感染面への不安がある	免疫がないからそういう面（感染面）で不安がある（1）	6

サブカテゴリーで構成された。《友人に病気のことを伝えたくない》では〈言わなかったのは友だちにどう反応されるか恐かったかもしれない〉、《友人が支えとなる》では〈小児がん経験者と友人が大きな支えだった〉などのコードが含まれた。

３）【学習面】では、《勉強の遅れに不安がある》《院内学級にメリットを感じる》《前籍校の友だちと同じ内容で学びたい》の３つのサブカテゴリーで構成された。《勉強の遅れに不安がある》では〈院内学級の勉強時間は学校より少ないため勉強の遅れが心配である〉、《院内学級にメリットを感じる》では

表３　母親の復学前後の思いや言動

カテゴリー（コード数）	サブカテゴリー	コード（数）	対象文献
前籍校との繋がりに関すること（36）	同じ経験をさせたい	前籍校の行事に参加させたい（7）	4
		同級生と同じ制作物を作らせてあげたい（1）	4
		学校で給食を食べさせたい（1）	4
	想い出づくりをさせたい	教室で写真を撮らせてあげたい（1）	4
	足跡を残したい	名簿に子どもの名前を入れてほしい（3）	4,7
		子供の机と席を確保してもらいたい（1）	4
		子供の作品を学校の掲示板に貼ってもらいたい（1）	4
	前籍校と距離を感じる	退院まで前籍校から関わりがなかった（7）	4,7
		思いやりの言葉はなく事務的な質問しかされなかった（1）	7
		勉強より病気を治すのが一番と言われた（1）	4
		前籍校と話し合いをしたかったが自宅療養終了まで必要ないと言われた（1）	7
		病気の子を受け入れるのはまれなケースだからわからないと言われた（1）	4
	前籍校の教師に入院中の患児の様子を知ってほしい	前籍校の教師に院内学級を見学してもらい患児の様子を知ってほしい（1）	7
	転籍後も前籍校と関わりがある	学校の先生からいつでも来てくださいと言われた（1）	4
		患児のことをよく知る子と同じクラスにしてくれた（1）	7
		籍がなくても退院後に所属するクラスを決定してくれた（1）	7
		クラス替え後も継続して担任をしてくれた（1）	7
		担任が替わる際に十分な引継ぎをしてくれた（1）	7
		今後の行事を伝えてもらい復学の時期を上手く決定できた（1）	7
		前籍校からの働きかけで前籍校にてクラスメイトと過ごす授業を設けてくれた（1）	7
		担任の先生を通してクラスメイトと手紙のやり取りをしている（1）	5
		患児の病院での生活をクラスに伝えてもらった（1）	7
転校に関すること（17）	転校を考えていない	地元校に帰るものと思っていた（2）	4
		転籍が必要だと知らなかった（3）	4
	転校は仕方がない	転籍は必要だから仕方がないと思った（4）	4
	学籍の選択に困る	地元校と支援学校の所在の違いで教育内容が異なる（3）	4
		どちらの学籍を選択すべきか分からなかった（1）	4
		退院前に自宅療養中の学籍の移動を考えなくてはならない（1）	4
	転校に対してマイナスのイメージがある	転校が必要ならば院内での教育はやめようと思った（1）	7
		転校した事実を子供に伝えられなかった（1）	7
	院内学級は一時的なものと考える	転校というより入院中は違うところで勉強しているという気持ち（1）	5
復学に関すること（13）	主治医と前籍校との連携を望む	前籍校と主治医が長期的に連携することの重要性を伝えてほしい（1）	7
		主治医から治療で経験した身体的・心理的苦痛と頑張りを伝えてほしい（1）	7
		担任教師と主治医の直接の話し合いを希望したが聞き入れられなかった（1）	7
	院内学級の教師のサポートを心強く感じる	院内学級の教師からのアドバイスは心強かった（2）	7
		院内学級の教師から前籍校の教師との話し合いの内容を教えてもらい安心することができた（1）	7
	治療中に復学まで考えられない	勉強の遅れが気になるが治療中の子どもに勉強をやれとは言えない（1）	5
		治療で頭がいっぱいで復学まで考えられない（1）	5
	復学してみないとわからない	復学後の問題は実際に学校に戻ってみないとわからない（1）	5
	学校生活へ不安がある	クラス替えによる環境の変化に不安がある（2）	4,5
	学校の先生から病気のことを伝えてほしい	校長先生から子供たちに病気やかつらのことを伝えてほしい（1）	5
	復学を意識する	きょうだいと一緒に学校に通わせたい（1）	4
周囲の理解に関すること（7）	復学後の周囲からの対応に不安がある	クラスメイトや保護者からの病気に関する偏見に不安がある（1）	4
		先生の子供への特別扱いに対する不安がある（1）	4
		治療で髪がないことをからかわれたり仲間外れにされないか心配である（1）	5
		入院中にクラス替えがあったため新しいクラスに馴染めるか心配である（1）	5
	保護者やクラスメイトの理解がない	同級生の保護者に分かってもらえない（1）	4
		クラスメイト以外の児童生徒から乱暴な言動があった（1）	7
		必要以上の過剰な配慮があった（1）	7
学習面（7）	学習の遅れに対する心配がある	入院中の授業時間は圧倒的に少なく学校の進度とは遅れている（3）	4,5
		前籍校との学習の開きがわからない（1）	5
	病棟内にも学習環境が欲しい	病棟内に自習ができる勉強部屋があったらよい（1）	5
		ベッドサイドでの学習は集中力が削がれて学習意欲は上がらないようである（1）	5
	学習環境に差があると感じる	院内学級はマンツーマンだから学校と違い友達と比較して学ぶことができない（1）	5
相談相手に関すること（5）	相談できる相手がいない	誰に相談すればいいかわからない（1）	4
		病室の母親に相談しにくい（1）	4
		医師は書類を書いてくれるけど相談できない（1）	4
		看護師さんは聞いてくれただけ（1）	4
	相談できる相手がいる	退院後も困ったときは外来受診の際に相談していいと言われ大変嬉しかった（1）	7
患児の心理面（5）	患児の精神面が心配である	子供が思うように体が動かないなどの現実に直面して落ち込んでいる姿を見るのが辛かった（1）	7
		勉強がわからないと学校に行きたくなくなるのではないか（1）	4
		みんなと同じ活動が全部だめになると子どもが落ち込みそうだ（1）	5
		自分だけできないことが苦痛だと思う（1）	5
		先生一人と生徒大勢になるとつまずいてもフォローは望めないだろう（1）	5
感染面（3）	感染面が心配である	感染症対策について前籍校の先生と調整しなくてはいけない（1）	5
		感染症の面で心配がある（1）	5
		インフルエンザがクラス内で流行っても連絡がなかった（1）	7

表４　患児と母親の復学前後の思いや言動のカテゴリーの比較

患児		母親	
カテゴリー	コード数	カテゴリー	コード数
周囲の理解に関すること※	21	前籍校との繋がりに関すること	36
友人面	17	転校に関すること	17
学習面※※	12	復学に関すること	13
生活への制限や希望に関すること	12	周囲の理解に関すること※	7
体力面	11	学習面※※	7
複雑な気持ち	2	相談相手に関すること	5
感染面※※※	1	患児の心理面	5
		感染面※※※	3
合計	76	合計	93

※，※※，※※※患児と母親に共通したカテゴリー

〈病院に来ても院内学級で普通に勉強できることが嬉しかった〉などのコードが含まれた。

4）【生活への制限や希望に関すること】では、《通院や生活の制限で学校生活に影響がある》《また同じ学校生活を送りたい》の２つのサブカテゴリーで構成された。《また同じ学校生活を送りたい》では〈復学したら友だちには前と同じように接してほしい〉などのコードが含まれた。

5）【体力面】では、《復学後は体力が落ちている》《体力回復のための退院後の支援がほしい》の２つのサブカテゴリーで構成された。《復学後は体力が落ちている》では〈体力が無くて学校に行くだけでもしんどい〉や〈筋力が落ちて皆についていけない〉などのコードが、《退院後の体力回復のための支援がほしい》では〈退院後に体力回復のための専門的な指導があれば良いと感じる〉などのコードが含まれた。

6）【複雑な気持ち】では、《特定できない不安》《退院に対する複雑な気持ち》の２つのサブカテゴリーで構成された。《特定できない不安》では〈実際に学校に戻ってみないとわからない〉というコードが含まれた。

7）【感染面】では、《感染面への不安がある》の１つのサブカテゴリーで構成され、〈免疫がないからそういう面（感染面）で不安がある〉というコードが含まれた。

２．母親の復学前後の思いや言動（表３）

対象文献より「母親の復学前後の思いや言動」として93コードが抽出され、27サブカテゴリーから【前籍校との繋がりに関すること】(37)、【転校に関すること】(17)、【復学に関すること】(12)、【周囲の理解に関すること】(7)、【学習面】(7)、【相談相手に関すること】(5)、【患児の心理面】(5)、【感染面】(3) の８カテゴリーが生成された（(　) 内はコード数)。

1）【前籍校との繋がりに関すること】では、《同じ経験をさせたい》《想い出づくりをさせたい》《足跡を残したい》《前籍校と距離を感じる》《前籍校の教師に入院中の患児の様子を知ってほしい》《転籍後も前籍校と関わりがある》の６つのサブカテゴリーで構成された。《前籍校の教師に入院中の患児の様子を知ってほしい》では〈前籍校の教師に院内学級を見学してもらい患児の様子を知ってほしい〉のコードが含まれた。

2）【転校に関すること】では、《転校を考えていない》《転校は仕方がない》《学籍の選択に困る》《転校に対してマイナスのイメージがある》《院内学級は一時的なものと考える》の５つのサブカテゴリーで構成された。《学籍の選択に困る》では〈地元校と支援学校の所在の違いで教育内容が異なる〉〈どちらの学籍を選択すべきか分からなかった〉などが、また《転校に対してマイナスのイメージがある》では〈転校が必要ならば院内での教育はやめようと思った〉のコードが含まれた。

3）【復学に関すること】では、《主治医と前籍校との連携を望む》《院内学級の教師のサポートを心強く感じる》《治療中に復学まで考えられない》《復学してみないとわからない》《学校生活へ不安がある》《学校の先生から病気のことを伝えてほしい》《復学を意識する》の７つのサブカテゴリーで構成された。《主治医と前籍校との連携を望む》では〈前籍校と主治医が長期的に連携することの重要性を伝えてほしい〉や〈主治医から治療で経験した身体的・心理的苦痛と頑張りを伝えてほしい〉などが、また《院内学級の教師のサポートを心強く感じる》では〈院内学級の教師からのアドバイスは心強かった〉

のコードが含まれた。

4）【周囲の理解に関すること】では、《復学後の周囲からの対応に不安がある》《保護者やクラスメイトの理解がない》の２つのサブカテゴリーで構成された。《復学後の周囲からの対応に不安がある》では〈クラスメイトや保護者からの病気に関する偏見に不安がある〉といったコードが含まれた。

5）【学習面】では、《学習の遅れに対する心配がある》《病棟内にも学習環境が欲しい》《学習環境に差があると感じる》の３つのサブカテゴリーで構成された。《学習の遅れに対する心配がある》では〈入院中の授業時間は圧倒的に少なく学校の進度とは遅れている〉〈前籍校との学習の開きがわからない〉というコードが含まれた。

6）【相談相手に関すること】では、《相談できる相手がいない》《相談できる相手がいる》の２つのサブカテゴリーで構成された。《相談できる相手がいない》では〈誰に相談すればいいかわからない〉や〈病室の母親に相談しにくい〉などのコードが含まれた。

7）【患児の心理面】では、《患児の精神面が心配である》の１つのサブカテゴリーで構成され、〈子供が思うように体が動かないなどの現実に直面して落ち込んでいる姿を見るのが辛かった〉というコードが含まれた。

8）【感染面】では、《感染面が心配である》のサブカテゴリーで構成され、〈感染症対策について前籍校の先生と調整しなくてはいけない〉などのコードが含まれた。

３．患児と母親の復学前後の思いや言動のカテゴリーの比較（表４）

患児の復学前後の思いや言動のカテゴリーにおいてコード数が多かったカテゴリーは、【周囲の理解に関すること】【友人面】の順であった。また、母親の復学前後の思いや言動においてコード数が多かったカテゴリーは、【前籍校との繋がりに関すること】【転校に関すること】の順で挙げられた。さらに、患児と母親に共通した復学前後の思いや言動は、先述した【周囲の理解に関すること】【学習面】【感染面】の３カテゴリーであった。

考　　察

１．患児の復学前後の思いや言動

患児の復学前後の思いや言動において特徴的に挙げられたのは、【友人面】【体力面】であった。【友人面】では、患児の復学において友人が大きな支えになっていると同時に、友人に病気のことを伝えるかという情報開示に関する内容がみられた。畑中[8]は、情報開示がうまくいくかは情報の具体性、説明のわかりやすさ、そして相手の気持ちの考慮度が影響すると考察している。そのためには、退院時に患児自身が病気を正しく理解し、友人にわかりやすく具体的に説明できるための支援が必要である。一方、【体力面】では《復学後は体力が落ちている》《退院後の体力回復のための支援がほしい》が挙げられており、患児は治療や長期入院に伴う体力低下を自覚し、これに対する支援を求めていることがわかる。堀江[7]は、小児がん経験者のための体力トレーニングや栄養指導をする専門職は極めて少なく、今後は医療機関等の専門職だけでなく、一般のトレーニング施設のスポーツ指導者や小児がん経験者が協働して健康づくりに取り組むことが小児がんへの理解につながることを示唆しており、復学後の患児に対する専門的な体力回復への支援が必要である。

２．母親の復学前後の思いや言動

母親の復学前後の思いや言動において特徴的なのは、【前籍校との繋がりに関すること】【転校に関すること】【相談相手に関すること】であった。【前籍校との繋がりに関すること】のコード数が最も多く、《同じ経験をさせたい》《足跡を残したい》などが挙げられており、母親は入院中も前籍校との繋がりを求めていることがわかる。前籍校との繋がりに関して平賀[9]は、入院中の患児と前籍校の繋がりが維持されていることが円滑な復学のために重要であると述べている。抽出された思いや言動には《転籍後も学校との関わりがある》一方で、《前籍校と距離を感じる》といった内容もあげられた。また、《前籍校の教師に入院中の子供の様子を知ってほしい》という母親の思いや言動もあった。入院中の患児と前籍校との繋がりを維持するために、医療者と前籍校が連携することが求められるのではないかと考える。具体的には前籍校の教師に入院中の患児の様子を実際に見学してもらう、復学の話し合いに積極的に参加してもらうなど、前籍校と医療者が連携し円滑に復学ができるような支援が必要であり、前籍校との繋がりが維持されていることは患児の復学意欲や治療意欲へもポジティブに働くのではないかと考える。また、【転校に関すること】では、《転校を考えていない》《転校は仕方がない》《学籍の選択に困る》などが挙げられており、患児の学籍に対する

母親の思いがあらわれていた。患児と母親が納得して、継続した学習のための学籍を選択できるような情報提供が必要であると考える。さらに、【相談相手に関すること】では《相談できる相手がいない》が挙げられており、母親は復学に関する相談を誰にすればよいのかわからずにいることがわかる。復学支援は医療者の役割のひとつであり、相談体制の構築や整備など家族も含めた支援が必要である。

３．患児と母親の復学前後の思いや言動のカテゴリーの比較

患児と母親に共通して挙げられた復学前後の【周囲の理解に関すること】【学習面】【感染面】の思いや言動のうち、【周囲の理解に関すること】では周囲の理解の有無、患児や母親への対応や配慮について挙げられており、患児の【友人面】で述べた情報開示における支援とともに、病気に関する情報を保護者から復学先に伝えるだけではなく、保護者や本人の了承を得たうえで医療者が復学先に提供し、受け入れ側の理解を深める支援なども必要である。また、【学習面】では《勉強の遅れに不安がある》ことや《学習の遅れに対する心配がある》ことなどが挙げられており、患児と母親は入院に伴う学習の遅れを危惧していた。これは、訪問学級や院内学級の学習が、患児の体調を考慮しながら行う必要があることや制度上の時間数の規定などから、十分な学習時間をかけられないためであると考える。学習の遅れは、復学後の学校不適応感に繋がる可能性があり重要な問題であることから、患児の希望、治療の進み具合や体調を考慮したうえで訪問学級あるいは院内学級の教師が病棟スタッフと連携し、個別に学習計画を立案できるような支援があると望ましい。【感染面】では治療による免疫力低下から復学後の感染に対する不安や心配が挙げられていた。感染面での留意点を具体的に医療者から復学先に情報提供することで、感染に対する患児と母親の不安の軽減や、感染面の配慮に関して復学先と連携が取りやすくなると考える。

また、患児の復学前後の思いや言動においてコード数が多かったカテゴリーは、【周囲の理解に関すること】【友人面】であった。学童・思春期の子供の学校生活には友人関係が大きく関わる。復学を控えた患児にとって周囲の友人から理解してもらえるか、病気について友人にどう伝えるかといった友人関係に関する関心の高さが伺えた。先行研究[10)－11)]においても患児の関心事として友人関係が多くあげられており、本研究結果と同様であった。一方、母親の復学前後の思いや言動においてコード数が多かったカテゴリーには、【前籍校との繋がりに関すること】【転校に関すること】があり、患児から挙げられたものとは異なっていた。母親にとって患児の復学における環境や制度に関する関心が高く、これは学籍の選択や転校の手続き、入院中の患児と前籍校との窓口を保護者が担っていることが影響していると考えられる。復学前後の思いや言動に患児と保護者で異なる内容があることを考慮に入れ、それぞれに合わせた支援内容を検討することが必要であると考える。

４．研究の限界と今後の課題

本研究は、患児と母親の復学前後の思いや言動を文献検討により明らかにしたものであるが、分析データは著者が実際のインタビューで得たものではないこと、対象患児における治療時、インタビュー時の年齢が均一ではないこと、同一患児と母親の思いや言動の変遷を復学前後で経時的に見たものではないこと、また、患児と母親の思いや言動が同時報告されているのは１文献のみであったことなどから、結果の一般化には限界がある。しかし、復学にあたり患児と母親が実際に抱いた思いや言動を整理した本研究は、長期入院を余儀なくされる小児がん患児と家族の復学支援を検討するうえで非常に重要な指針を与えるものと考える。本研究の成果を踏まえ、患児と家族に対する具体的な復学支援策を検討し推進することが今後の課題である。

結　　論

小児がんの子供（患児）とその母親（母親）の復学前後の思いや言動について文献検討した結果、以下のことが明らかになった。

1．「患児の復学前後の思いや言動」は、【周囲の理解に関すること】【友人面】【学習面】【生活への制限や希望に関すること】【体力面】【複雑な気持ち】【感染面】の７カテゴリーに分類され、とくに治療による患児の体力低下への継続的な支援や、病気の情報開示への支援の必要性が示唆された。

2．「母親の復学前後の思いや言動」は、【前籍校との繋がりに関すること】【転校に関すること】【復学に関すること】【周囲の理解に関すること】【学習面】【相談相手に関すること】【患児の心理面】【感染面】の８カテゴリーに分類され、とくに前籍校と患児の繋がりを維持するための医療者と前籍校との連携や、相談体制の構築や整備など家族も含めた復学支援の必要性が示唆された。

３．「患児と母親に共通した復学前後の思いや言動」は、【周囲の理解に関すること】【学習面】【感染面】の３カテゴリーであり、医療者から復学先への病気や感染面での留意点の情報提供の支援や訪問学級、院内学級の教師による個別の学習計画の立案などに対する支援の必要性が示唆された。

患児の復学にあたっては、患児とその家族が復学前後に実際にどのような思いを抱いているかを理解することが重要である。

利益相反に関する開示事項はない。

引用文献

１．国立がん研究センター小児がん情報サービス：小児がんとは．https://ganjoho.jp/child/dia_tre/about_childhood/about_childhood.html，（参照2021-06-17）．

２．国立がん研究センター：がんの統計2021．https://ganjoho.jp/data/reg_stat/statistics/brochure/2021/cancer_statistics_2021_fig_J.pdf，（参照2021-06-17）．

３．市江和子，藤田敬之助，西垣五月，上條隆司：小児看護における小児のQOLの概念分析，聖隷クリストファー大学看護学部紀要　2018；31-39

４．涌水理恵，平賀紀子，古谷佳由理：小児がんで長期入院を余儀なくされた児への復学支援を考える－児・保護者・スタッフの復学に向けた思いとその変化に焦点を当てて－．小児保健研究　2013；72(6)：824-833［対象文献５］

５．山口そのえ，嶋田明，山本裕子，小田慈：小児がん患者の復学をスムーズにする要因の検討　院内学級に通級したことのある子どもの体験より．小児がん看護　2017；12(1)：25-30

６．副島尭史，村山志保，東樹京子，佐藤伊織，平賀健太郎，武田鉄郎，他：小中学校の教員における小児がんへの認識および小児がん経験者への支援．小児保健研究　2014；73(5)：697-705

７．堀江久樹：小児がん経験者の社会復帰に向けた生活と就労．看護教育研究学会　2018；10(1)：51-62［対象文献２］

８．畑中めぐみ：思春期の小児がん患児の復学後の情報開示．小児保健研究　2013；72(1)：41-47

９．平賀健太郎：小児がん患児の前籍校への復学に関する現状と課題－保護者への質問紙調査の結果より－．小児保健研究　2007；66(3)：456-464［対象文献７］

10．澤田唯，仁尾かおり：思春期に発症した小児血液・腫瘍疾患経験者の退院後の環境に対する認知．日本小児看護学会誌　2019；28：182-190

11．岸田恵美，石川眞里子：思春期にある小児がん患者の復学に関する適応に影響する要因－子どもの経験の語り－．小児がん看護　2020；15(1)：16-25［対象文献１］

Yamagata Med J (ISSN 0288-030X) 2023 ; 41(2) : 59-67
DOI 10.15022/0002000121

A literature review of children with cancer and their mothers' thoughts and actions before and after returning to school

Yumeka Yageta*, Yukiko Sato, Shiho Konta****

**Tohoku University Hospital*
***School of Nursing, Yamagata University Faculty of Medicine*

ABSTRACT

The present study investigated the thoughts and actions before and after returning to school in pediatric cancer patients and their mothers. A literature review was conducted using the keywords "children with cancer," "school," "returning to school," and "thoughts." We extracted seven articles using the Ichushi-Web database (ver. 5).

The analysis consisted of identifying, from the literature, thoughts and actions of pediatric cancer patients and their mothers about returning to school then inductively categorizing them based on similarity.

The 'thoughts and actions of children with cancer before and after going back to school' were classified into seven categories: "academics," "physical strength," "infection," "friends," "understanding by others," "complex emotions," and "lifestyle limitations and desires." The 'thoughts and actions of mothers of children with cancer before and after going back to school' were classified into eight categories: "academics," "changing schools," "connections with the previously attended school," "going back to school," "infection," "psychological well-being of the children," "understanding by others," and "someone to turn to for advice."

The findings suggested the need for support for returning to school, such as i) disclosing information about the disease to patients, ii) ongoing assistance related to loss of physical strength due to treatment, and iii) family-inclusive support.

Keywords: children with cancer, mother, school re-entry, thoughts, literature review